



TITLE:

# 学問と生の連関を巡る論争：トレルチ「学問における革命」より

AUTHOR(S):

小柳, 敦史

---

CITATION:

小柳, 敦史. 学問と生の連関を巡る論争：トレルチ「学問における革命」より. キリスト教と近代的知 2010, 2009: 79-93

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/108438>

RIGHT:

キリスト教と近代的知 「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会

2010年3月 79～93頁

論文

学問と生の連関を巡る論争  
トレルチ「学問における革命」より

小柳 敦史

はじめに

制度化された学問は、西欧近代的な知の体系の担い手として、キリスト教についての言説を含めたあらゆる知的活動が否応無くそこに立脚せざるを得ない存在基盤であったし、そうあり続けている。しかし、「学問」のあり方そのものも不動のものではなく、繰り返し問い直されてきた。またその問い直しは、たとえ表面上は「反近代」の旗印を掲げていたとしても、実際には近代の問題設定の中でなされてきたのであり、そうした絶えざる問い直しの過程を含めて近代と学問の関係は論じられなくてはならない。本稿ではこうした問い直しの一例として、20世紀初頭のドイツにおいてマックス・ウェーバーに代表される古い世代に対してゲオルゲ・クライスのメンバーが要求した学問における「革命」について、ウェーバーと同世代に属しながら「革命」に対しても一定の理解を示したエルンスト・トレルチの診断を手がかりに考えていきたい。

キリスト教が神学という形で近代的学問に参加している以上、学問の変革が求められたときには神学のありかたも影響を受けざるを得ない。しかし、本稿で取り上げる学問における「革命」においてキリスト教は、そのような派生的な影響を蒙っただけではなかった。革命を訴える若い世代は古い学問のありかたをプロテスタンティズム批判と結び付けて彼らの革命の訴えを展開したのである。とはいえ、古い学問の擁護者たるウェーバーが学問擁護とプロテスタンティズムの弁証を結び付けたわけではなく、若い世代からのプロテスタンティズム批判は宙に浮くことになる。この問題は論争の診断者であるトレルチにより引き受けられることになり、それによりトレルチは単なる診断者ではなく、この論争において一つの独自の位置を持つことになる。学問における「革命」を契機とすることで、近代と学問とプロテスタンティズムの関係をめぐる思想地図の上に三者 ウェーバー、ゲオルゲ・クライス、トレルチ を配置することを本稿は試みる。

本稿ではまず第一章において「学問における革命」を考察するために、この論争を規定している二つの極について概観する。すなわち、『職業としての学問』におけるウェーバーの学問観と、それに反対するゲオルゲ・クライスに属する学者たちの学問観である。続いて第二章においてトレルチの目に映った「革命」の状況と意味を確認する。その上で最終第三章において、トレルチの近代理解を元に、学問の担う課題と近代的な知の運命についてのトレルチ自身の理解がどのようなものなのか、それがウェーバーやゲオルゲ・クライスの学問論とどのような差異を示しているのか考察を加えたい。

## 1. 学問における革命をめぐる論争状況

20世紀初頭、とりわけ第一次世界大戦後のドイツにおいて、西欧近代が育んできた合理的知の体系としての学問が孕む歪みが顕在化しつつあった。「そこには、世代を問わず人々を襲ったヨーロッパの大破局の予感があり、その底流を走る「学問の危機」ないしは文化の基盤そのものの動揺のなかで「人格」や「体験」が流行の偶像として祭り上げられる地すべりのような変化があった。この巨大な転形のうねりに鋭敏に、時には常軌を逸する程の激しさで反応したのは、知の現状に失望しつつも「精神革命」を標榜する若い世代であった」<sup>1</sup>のである。この「若い世代」の中でも、革命への要求を既成の学問批判へと最も直接的に結び付けたのが、詩人シュテファン・ゲオルゲの圧倒的な影響のもとで姿を現したゲオルゲ・クライスのメンバーたちだった。そして彼らが「古い学問」の象徴として批判の矛先を向けたのがマックス・ウェーバーの学問論、とりわけそれが最も明瞭に表現された講演『職業としての学問』である。一方で『職業としての学問』の側からしても、そこではゲオルゲ・クライスに代表される「若い世代」に対する明確な反論が為されていることが容易に見て取れる。ウェーバーとゲオルゲ・クライスはお互いを論争相手として意識しながらそれぞれの学問論を展開していたのである<sup>2</sup>。

### 1・1. 『職業としての学問』

まず始めに、論争の出発点となった『職業としての学問』<sup>3</sup>におけるウェーバーの主張を確認しよう。古い学問の擁護者たるウェーバーの「スワン・ソング」と目されるこの講演において、ウェーバーはアメリカとドイツの大学制度の違いやそこから生じる大学人の就職事情などから議論を起すすが、本稿ではウェーバーの学問観と大学人の職務に議論を集中する。

その学問観の大前提となるのは、学問が人間の合理的思考を体現したものであるということである。「学問の進歩は、元来、人類が何千年来それに従ってきた合理化の過程の一部、いな、そのもっとも主要なる部分をなすもの」<sup>4</sup>なのである。ここから当然のことながら、学問の課題は合理的な思考にのみ限定され、合理的思考によって捉えられない対象は学問の手から逃れることになる。合理的思考がきっぱりと断念をしなければならない対象とは、例えば「体験」である。

「かれら（体験というものをとめる人：引用者注）は従来の合理主義がいまだ取り扱ったことのない唯一のもの、すなわちこの体験という非合理的なものの領域を、合理的意識にまで高めてこれを仔細に吟味するのである。非合理的なものを合理化しようとする現代の浪漫主義は、結局、矛盾におちいる。このようにして合理主義からの離脱をめざす試みは、実はこれを試みる人たちが考えているのとは全く反対の結果に導くのである」<sup>5</sup>

合理主義の限界を克服しようとして直接的な体験に訴えたところで、その結末は非合理主義の限界を露呈すること以外の何者でもない。たとえ「体験」のようなものを捉えようとしても、

それを学問として考察しようとするれば学問において体现されている合理化の過程から逃れることは出来ないのである。そしてここからさらに二つの方向へと議論が進められる。それは学問の進歩とともに専門化していく学問に従事する研究者としての職分と、そのように高度な専門性を帯びた学問について学生に伝える教師としての職分についてである。

前者についてウェーバーが明言するのは、「学問がこんにち専門的に従事されるべき「職業」としてのもろの事実的関連の自覚および認識を役目とするものであり、したがってそれは救いや啓示をもたらす占術者や予言者の贈りものや世界の意味に関する賢人や哲学者の瞑想の産物ではないということ」<sup>6</sup>である。研究者は自分の専門領域における事実的な研究に従事しそれを通じて学問の進歩に貢献することが求められるのであって、もはや世界観全体に対する答えを提出することは不可能であるし、そうしようとしてはならない。それまでの学問的な成果の上に新たな成果が為されるという理解は学問観としては素朴であるが、少なくとも個別の専門研究に従事している研究者の意識としてはそうではありえないとウェーバーは言うのである。知的世界、あるいは生活世界全体を支配する唯一の神はもはや想定しえず、それぞれの領域内で支配力を持つ小さな神々がたくさん存在することになる。それゆえ、「学問が把握しうることは、それぞれの秩序にとって、あるいはそれぞれの秩序において、神に当たるものは何であるかということだけ」であり、そこから教師としての役割も自ずと限定されることになる。すなわち、「教室で教師がおこなう講義も、この点を理解させることができればその任務は終るのである」<sup>7</sup>。

学問に携わる者の職務をこのように制限するウェーバーにとって、当時の学生たちの欲求は由々しきものであった。なぜなら、「われわれが教壇に立つのは教師としてのみである」にもかかわらず「かれらは講義者のなかに、そこにかれらにたいして立っている人ではない別のある人 つまり教師ではなく指導者をもとめている」<sup>8</sup>からである。ウェーバーにとって見れば、若者たちのそのような態度が意味しているのは、多くの神々が争い合う現実 ウェーバーにとってみれば「日常茶飯事」に彼らが耐えることが出来ていないということであった。

高度な専門性を帯びた実証的な学問に耐えることの出来ない若者たちに対するウェーバーの批判は執拗なものであり、たとえば『宗教社会学論集』の序文にも以下のような文言を確認することが出来る。ウェーバーは大学の授業において世界観を求めるような若者たちに対して、「「直観」を求める者は映画へ行くが良い。・・・（中略）・・・「説教」を求める者は秘密集会へ行くが良い」<sup>9</sup>と言いつつのである。こうして我々は、ウェーバーの立場から見た若い世代の問題点に到達したと言えるだろう。そこで次に、ここで問題とされている若い世代とはどのような人々だったのかを確認したい。

## 1・2・ゲオルゲ・クライスの学者たち

ウェーバーの『職業としての学問』をとりまいていた知的世界には、ウェーバーがよって立つ新カント派の理性主義を中心とする講壇哲学に対抗して生の全体性を希求する表現主義ないし生の哲学の隆盛、さらにはゲオルゲ・クライスの神秘体験論が「濁りに濁った発酵状態」と

して沸きたっていた<sup>10</sup>。その中でもウェーバーが「若い世代」と言う時に念頭に置いていたのはゲオルゲ・クライスのメンバーたちであった。ゲオルゲ・クライスは詩人シュテファン・ゲオルゲ (Stefan George, 1868-1933)を中心として集まった芸術家、思想家のグループであるが、その全体像を描くことは難しい。ただし大まかに言って、ゲオルゲの周囲には前期と後期で性格の異なるグループが結集していた。同人誌『芸術草子』をメディアとする、詩人仲間による初期のクライスと『精神運動年鑑』をメディアとし、ゲオルゲを神格化する後期のクライスである。学問のありかたをめくりウェーバーと論争を繰り広げたのは後期のクライスである。「精神」とは「生」や「体験」と並ぶ20世紀初頭の思想界における論争概念の一つであり、「『精神運動年鑑』という誌名は、当時の文脈から見れば、ゲオルゲ・クライスが芸術運動の枠から脱し、直接的な時代批判・学問批判へと踏み込むことの宣言であった」<sup>11</sup>。

後期のクライスはこうして当時の知的世界の布置連関の中に参入してくるのだが、その研究は未だ十分になされていない。まず、80年代までゲオルゲ及びゲオルゲ・クライスについての言明は、ゲオルゲの人格及びその作品の帯びる神話性、ベンヤミンやアドルノのゲオルゲ批判の圧倒的な影響、ゲオルゲ・クライスの思想とナチス神話との結びつきとそれに対する反動としての反ナチ化の試み、といった様々な神話に彩られていた。その後になりやっと「非・神話化」を試みる研究が現れてきた<sup>12</sup>。その結果2002年には「ゲオルゲの個人的な影響を受けていない初めてのモノグラフ」としてノートンのゲオルゲ評伝<sup>13</sup>が著された。しかし2008年時点でも「グンドルフやヴォルターズといったゲオルゲ・クライスの指導的なメンバーについての、著作、個人的な知的プロフィール、同時代の一般的な問題の諸相と結びついた、批判的な要求にとって十分な伝記」は存在しておらず<sup>14</sup>、クライスの構成員についての詳細な研究が待たれるところである。

論者はゲルマニスティクを専門とするものではなく、ゲオルゲの作品と思想を論評する能力を持たないし、本稿でゲオルゲ・クライスの構成員たちの学問論を逐一検討することも出来ない。以下でシュテファン・ゲオルゲ協会会長であるベルトラム・シェフォールトの記述<sup>15</sup>を参考にゲオルゲ・クライスと学問の関係について概観するにとどめ、その後に次節でトレルチの論考を通してウェーバーに対するゲオルゲ・クライスからの反論の内容を確認したい。

シェフォールトは、「さまざまな学問領域で数年にわたって名を馳せた、才能ある一連の学者たちに対して、ひとりの詩人が影響をあたえ、しかもそれは同時代の人々の目をひきつけるほどであったという事態」へと目をむけさせる。ゲオルゲのもとに集まった学者たちは「生ある詩人の世界と、学問は「アカデミック」でなければならないという、あの支配的な考え方」との相克を感じつつ、この互いに反目する二つの環境を動き回った<sup>16</sup>。この相克の印象はクライスのメンバーにとっての問題であって、ゲオルゲその人にとっては何の矛盾も無かった。ゲオルゲが学問に要請していたものは少なかったし、素朴なものであったという。すなわち、「学者の行為とは、批判し突き崩すことにはなく、価値あるものを高めることにある。あつかう素材を意のままにするのではなく、偉大なもの、重大なものを追いもとめ、叙述の美のために精励すべきであるということ」<sup>17</sup>であった。それゆえ、ゲオルゲの「詩人の世界」から学問に対する要

求は何か体系的な綱領のようなものとして提出されたわけではなく、それまでの学問の方法論や成果が完全に破壊されたわけではなかった。例えば、ゲルマニスティクの領域では、それまでの文献学の成果がまもり通されたのである。クライスが新たな学問の使命として感じていたのは、個別研究のありかたを変革することではなく、個別研究から精神史への「シフト」チェンジ、すなわち態度の変革であった<sup>18</sup>。

シェフォールトは続いて彼の専門領域である経済学の分野においてゲオルゲ・クライスの学者たち ザルツ、ザリーン、ジンガー、ヴォルターズなど がどのような意味で「ゲオルゲ・クライス的」であったのかを検証する。我々はその具体的な内容を追う必要は無いだろう。ここで確認されることも上記の概略と異なるものではない。シェフォールトによれば、

「クライスにおいて統一性は、内容においてではなく一般的な志向、方法、形式のなかに見出される。つまり、精神的な運動が、物質的な発展に先立って、あるいは並走して、これを超えて展開されるという事実を、あらゆる叙述を尽くして形態化し、実証しようとする努力のなかに、見出された」<sup>19</sup>。

以上のような全体的な方向性の範囲内で、個々の人々の姿勢は各人の置かれた状況や関心の違いによって異なるものとなった。以下で我々はトレルチの記述を通してエーリヒ・フォン・カーラーとアルトゥーア・ザルツという二人のゲオルゲ・クライスに属する学者に出会うことになるが、両者の間にはかなりの違いがあった。カーラーの過激なウェーバー批判はゲオルゲによってすら撥ねつけられた一方で、ザルツはウェーバーとも個人的な親交を持ちつつ、カーラーの論文の欠陥を厳密に検証したのである<sup>20</sup>。しかしその相違を包含する共通性を彼らは保持しており、トレルチもまた彼らに共通する欲求を認識していた。

## 2. 「学問における革命」に対するトレルチの懸念と期待

本節ではトレルチの論考「学問における革命」<sup>21</sup>を通して、トレルチの目に映った当時の論争状況と、それに対するトレルチの診断を見ていく。この論争について、トレルチの論考が扱っている範囲内であらかじめ時系列的な整理をしておく、ウェーバーの講演『職業としての学問』が初めて開催されたのが1917年であり、1919年に同じ内容の講演が再び為され、活字となり出版された。ここから論争が本格的に始まり、1920年にゲオルゲ・クライスの学問論の急先鋒と言えるカーラーの『学問の職分』(Beruf der Wissenschaft)が出版される。さらにゲオルゲ・クライス内の穏健派と言えるザルツがカーラーに対する再批判として論考「学問擁護のために。教養人の学問蔑視に対して」を発表した。以上の流れを受けて同年にトレルチが発表したのが本節で取り上げる論考「学問における革命」である。ここでトレルチは学問についての論争を生じさせた近代の知的状況全体に目を配っており、「「学問における革命」は、論争の背後にある時代潮流の地殻変動に関して要領を得た「交通整理」をしている」<sup>22</sup>と言えるものである。

## 2・1．「学問における革命」の背景

トレルチは若い世代が既成の学問に対して抱いている欲求を簡潔に表現すれば、「自然主義から、そしてそれとほとんど同一視される主知主義から離れること、しかしまた歴史主義からも、そしてそれとほとんど同一視される、大学での形骸化した学問活動の専門主義と相対主義からも離れること」<sup>23</sup>であると言う。それゆえ学問を改革する欲求は自然科学と人文・社会科学の全領域に関わりうるものである。しかし実際に問題となったのは精神科学、すなわち哲学と歴史学に関わるものであった。そして、学問の革命へと向かう動向はドイツだけに特有なものではなく、フランス、イタリア、イギリスでも進行しているものとトレルチはみなす。例えばフランスでその姿勢を代表するのがベルグソンの思想であった。トレルチによればベルグソンの教説は「主知主義と機械論との、あるいはそのもっと繊細な形式、すなわち世界観と世界感覚の数学化 最終的にいつも精神と自由を従属的なものにしてしまう数学化 に対してドイツとフランスの新カント派が与えた形式との決別」<sup>24</sup>なのである。こうした内容はイタリアではクローチェによって表明されていたし、ドイツではニーチェ、ディルタイ、ジンメル、フッサールに同様の問題意識を認めることができるという。

学問の革命を求める精神性は全ヨーロッパに共有されるものであったと言えるが、新たな学問の姿を求める運動体としては具体的にいくつかのものに限定される。古い学問においては生に対する指針を見出すことが出来ないと感じた若い世代は、「規範と教義」を求めて強烈な人格を持つ指導者の元に集まった。そういった指導者としてパウル・ナトルプ、レオンハルト・ネルソン、カイザーリンク伯爵、シュタイナー、そしてシュテファン・ゲオルゲが挙げられる。ゲオルゲの周囲に集まった若者たちについて言えば、「本質的なことは、ゲオルゲが彼の全存在において規範と教義であるということだけ」<sup>25</sup>であるが、我々がすでに前節で見たように、ゲオルゲ自身は自身が体现している規範と教義を学問論として展開したわけではなかった。「彼自身はその価値体系をその人格において表明したし、彼の詩の中でそれは形を与えられた。しかし彼の学派はこの価値体系を学問へと導入した」<sup>26</sup>のである。そのような学問的著作の例としてトレルチは、ハイデルベルク時代の同僚であるグンドルフの著作を取り上げ、論評を加える。その内容についてここでは割愛するが、トレルチがグンドルフの著作に代表されるゲオルゲ・クライスの立場を再び広い文脈の中へと位置づけていることは、確認しておいて良いだろう。「我々との関わりで重要なのは、新たな方法というものがゲオルゲ学派だけに限定されたものではなく、他の者による他の解答によってもとても似た仕方で扱われているということ」<sup>27</sup>だと述べ、シュペングラーの『西欧の没落』や、宗教思想の内部においてはヨハネス・ミュラーなどの反主知主義の動向、ゴーガルテンなどに見られるキルケゴールの影響、活発な活動をしているディードリヒス出版社から出された著作物、マックス・シェーラーの思想、フッサールの現象学の試みなどにゲオルゲ・クライスと通じる問題意識を指摘する。

## 2・2．ゲオルゲ・クライスによる学問批判とその問題点

このようにトレルチは、知的世界の大きな変動の中にゲオルゲ・クライスを位置づけた上で、

焦点となるカーラーの『学問の職分』の論評へと移る。その論争的な性格から、トレルチは「これは闘争宣言」であると性格づけるが、「これは実際、とても若々しいけれども決して凡庸ではない、人間的に深く胸を打つ書物である」という評価を与えている<sup>28</sup>。そして以下のようにカーラーの主張をまとめる。

「『職業としての学問』についての講演においてマックス・ウェーバーが与えた記述に対する反論として、カーラーは彼の命題を終始論争的に定式化した。それによりカーラーは最初から断固として、実証主義と非常に親近的な新カント主義の形態のうちに「古い学問」を見ている。それに従うと、学問は専門諸学の連なりであり、どんな哲学からも切り離された、不可避的な近代世界の運命と本質になってしまう」<sup>29</sup>。

「主知主義のこの悲劇と今日の大学学問のサチュルス劇から外へと向かう道は、新たな人格的な指導と学問と生の新たな結びつき、すなわち預言者の時代に属するものであって今日にあっては不可能だとまさしくウェーバーが説明したものを通るしか無い」<sup>30</sup>。

言うまでもなく人格的な新たな指導者としてカーラーはゲオルゲを想定する。具体的な統一性を持った指導者によって示される規範に従うことで、学問と世界観もまた統一性を回復出来るのである。カーラーも従来の学問が行ってきた個別的・実証的な業績を完全に否定するわけではない。しかし「批判的調査は素材として背後に留められ、個的に有機的な像の芸術的な記述こそが与えられるべき」<sup>31</sup>であるということになる。たとえばグンドルフのゲーテ論においてその理想が実践されているという。

以上のようなカーラーの著作の帰結について、ゲオルゲ・クライス内の批判者であるザルツがすでに指摘していた。「こうしたことの帰結をザルツはとても明瞭に見据えている。つまり、堪え難いほどのディレッタンティズムや遊び半分の才気、不快なジャーナリズムなどの進展か、カトリックへの帰還である」ので、革命に期待を寄せる若者たちに対する作用は「不可避免的な失望という苦渋でしかない」<sup>32</sup>。学問成果を芸術作品へと昇華させることを声高に訴えるカーラーに対して慎重な態度をとるザルツではあるが、基本的な思考として共通なものをトレルチは認めた。それを両者の著作の「徴候的(symptomatisch)」な意義であると判断する。

そこに現れている徴候とは次のような内容である。

「とても重要かつ徴候的なことは、精神的な発展が明確に区別してきたし、実際に事柄において根本的に異なっている三つの物事をカーラーが一緒くたにしているということである。それは程度の差こそあれ厳密である実証科学、全体へと向かう哲学、実践的・個人的な生活態度である。これら三つのものを若者達は一跳びに手に入れようとしている」<sup>33</sup>。

ここでまずトレルチが問題視しているのは、カーラーに代表される若者たちが、学問と哲学と生活態度の区別を放棄していることである。トレルチにとってこのような強引な同一化は問



題を曖昧にするだけであってとても賛成出来るものではなかった。まずここにカーラーとトレルチの大きな相違点を確認出来るが、上に挙げた三点のそれぞれについてトレルチは引き続き自分の見解を述べる。

まず学問についてのトレルチの見解は明解である。彼ははっきりと、「ここで私は自分自身が全くもって古い学問に与することを明らかにする。なぜならそれ以外に学問はありえないからだ」<sup>34</sup>と述べる。先に我々も見たようにゲオルゲ・クライスの学者たちも個別の研究については従来の学問の方法論を踏襲していたのであり、学問のあり方から西洋近代の歴史的負荷を引きはがすことは出来ない。学問が学問であることを望むなら、現実にならざるどころの形態を認めるほか無いのである。

しかし、このことは個々の学問を超える全体性を把握しようとする哲学の意義を否定するものではない。ここでトレルチは専門化していく学問に危機感を感じる若者たちに共感を表明する。

「しかしながら哲学はもちろんいくらか異なる。まさに哲学というものはそもそも精密科学や実証科学ではない。そうではなく、全体を把握する道筋をどこかの点から切り開き、個々の諸学との確固とした関係をなんとか獲得しなければならないものなのである。この点について私個人としてはウェーバーとは全く違うように考えているし、カーラーの著作から感じ取ることの出来るある種の本能は、私にとっても不可能に思えるウェーバーの懐疑主義や価値を暴力的に肯定する英雄主義よりも真理に接近していると信じている」<sup>35</sup>。

ウェーバーが主張するように「神々の闘争」に耐え、そこから決断的に一つの価値を選びとることはウェーバーのような強烈な人格においてのみ可能になる英雄主義であって、万人にとって可能なものではない。闘争し合う神々の中のどれかを選ぶのではなく、この闘争が調停されることを人は望んで良いのだし、調停された世界観の中で安心して自らの専門研究に従事できるとも考えられる。そしてこの調停を提供することに哲学の役割がある。ウェーバーはもはやこのような哲学の役割を認めないが、トレルチは若い世代とともに知の全体性を求める哲学の必要性を主張するのである。

生活態度について述べる段になると、トレルチは再びゲオルゲ・クライスに対してきっぱりと距離をとる。人がなんらかの信念を実際の生活において実現しようとするなら、「隠遁や理想的な秘密集会」へと引きこもって限られたサークルの中で自分たちの信念に従って生活を送るか、実際にはいろいろと問題を含む現実社会の中で少しでも理想に近づくべく苦闘するほかない。しかし、ゲオルゲ・クライスの若者たちがやっているのは本を書いて現実の諸問題について嘆き悲しんでいるだけであって、それはトレルチにとっては「不毛な中間の道」であると思われた<sup>36</sup>。

このように見てくると、トレルチが「学問における革命」に対して積極的な評価を与えるのは、哲学の必要性についての理解だけであると言える。しかしそれは合理化の名のもとに専門

化していき、生を捉える力を失ってしまった学問への批判としては決定的なものであり、それゆえにトレルチはゲオルゲ・クライスの立場の徴候的な意義を積極的に評価することが出来た。一方でトレルチは既存の学問のありかたは保持されるほか無いと考える。かくして、学問の革命への要求と実証的な学問の関係について以下のように結論が述べられることになる。

「私個人としてはこう信じているのだが、このような事柄については信じると思うとかする以外には不可能である、このような現象の全てはとても真剣に受け取られるべきだし、とても深く進行しているのである。我々の学問的営為においてはとても多くのものが生気を失い慣習的なものになってしまっていて、世代交代は否定しようがない。しかしながら、この交代は厳密な、そして本来的に秩序あり実証的である学問との接触を再び見出すだろうし見出さなければならないと、私は信じ、かつ望んでいる。そのためには数学と自然科学、そして今日はとても嫌われているけれどもその核心においては学問的な明晰さを代表する文献学に、その課題が正しく理解されるならば、注意が向けられることになる」<sup>37</sup>。

トレルチの立場は、既存の学問のありかたを尊重しつつ、生の全体性の把握のために新たな仕方で知の体系化を行うものであると言って良い。これは、枠組みとしてはゲオルゲ・クライスの立場と異なるものではない。彼らもまた、従来の個別の学問の成果を否定し去ることはなかったのである。するとトレルチとゲオルゲ・クライスを分つのは、生活世界へと向けられた動機付けであるだろう。

### 2・3．「新しいロマン主義」としての学問の革命

「学問における革命」は直接的にはウェーバーに代表される近代的・合理的な学問制度への異議申し立てであるが、実際には「民主主義的及び社会主義的な啓蒙に対する、生活をほしいままに組織化する理性の合理的な独裁とそこで前提されている人間の平等と理知のドグマに対する大きな世界的反動の始まり」であり、いわば「新しいロマン主義」であると言える<sup>38</sup>。「新しいロマン主義」という特徴付けには、「学問における革命」に現れている精神的な動向に対する、トレルチの微妙な評価が現れている。新しいロマン主義は古いロマン主義と同様に「啓蒙の哲学よりもはるかに精神的に豊か」ではあるが、また古いロマン主義と同様に「本質的に観照的で貴族主義的」であって現実世界に対する活動性に欠けるのである<sup>39</sup>。トレルチは以下のように指摘して議論を終える。

「流行しているマルクス主義やルソー主義の教条ではなく、猛烈な産業集中と労働の組織化ならびに政治的な世界情勢の改変のことを考える者はもちろんそのようなロマン主義の無力さを見出すだけだろう。しかしそれに関わらず、教条や理念の同時代的な意義を知る者は精神的な転回を決してどうでも良い、影響の無いものとは見なさないだろう」<sup>40</sup>。

ここで挙げられている二つの立場、すなわちマルクス主義やルソー主義とは違ったやり方で世界情勢の変革を考える立場と理念の必要性を感じる立場、は二者択一ではなく、トレルチ自身の中にも、そしてゲオルゲ・クライスの中にも同時に存在するものと考えられる。その主張の内容について同意出来ない点は多々あるとしても、トレルチはゲオルゲ・クライスの要求の中に自分と共通する問題意識を認めることが出来たのである。

### 3．近代・プロテスタンティズム・学問

#### 3・1．近代の運命とプロテスタンティズム

これまでトレルチの視点を通してゲオルゲ・クライスに属する若い世代の立場を見てきたが、なぜ彼らは美的直観により生を捉えようとする彼らの方策を学問論として展開したのだろうか。ゲオルゲ自身がそうであったように、ゲオルゲ・クライスの若者たちは詩人の世界に引きこもり、学問の外側から学問のありかたを非難することも出来たのではないのか。しかしまさに、学問の内部で学問を変革しようとするからこそが彼らにとっては重要だったのである。前田良三は次のように指摘する。

「ここでは学問内部での実践が問題になっているのである。・・・（中略）・・・芸術運動としての自己主張を学問内部で行うというこの「<sup>キアスム</sup>入れ替え」にこそ、クライスの戦略上の要諦があったわけである。というのも、他ならぬ学問という社会システムこそ、西欧的な近代化＝合理化の原理が典型的なやりかたで貫徹された領域の一つだからである」<sup>41</sup>。

ゲオルゲ・クライスの近代合理性批判は、その成果を根本的に否定して素朴にプレ近代に立ち返ろうとするのではない。それは、彼らなりの仕方でのポスト近代的な知のあり方の模索であったと言えるのである。それゆえ、2節で我々も確認したように、ゲオルゲ・クライスは近代的な学問の成果を否定することは無かった。それを出発点としてそれ以上の何かを、彼らの場合には、個別研究の成果を素材として生の全体像や生を導く価値体系を構築することを目指したのだった。このことはトレルチにも意識されており、ゲオルゲが体現していた価値体系というのは、「プラトン、ダンテ、ニーチェへと甚だしく依拠することにおいて、そのものとしては近代の歴史主義から形成されたものである」と指摘されている<sup>42</sup>。ゲオルゲが自らの価値体系を構想する際に源泉としたものが反近代的だったとしても、その源泉から内容を汲み取ることを可能にしたのは、優れて近代的な発想である歴史主義的な発想だったのである。

近代的な学問に対するこのようなアンビヴァレントな関係は、その担い手である古い世代の学者たちとの関係にも当てはまる。ハイデルベルクのゲオルゲ・クライスの一員であるグンドルフにとっては「ウェーバーもトレルチも、ハイデルベルクにおける知的な「理念 闘争相手」の役を演じていたが、必要な場合には、権威的な証明のための保証人として引き合いに出された。しかしながら同時に時代遅れの学問概念の持ち主として批判の焦点に立ちもした」<sup>43</sup>のである。それゆえ、これからの学問のあるべき姿については意見を異にするにしても、その前提

となる近代的学問理解は、若い世代とウェーバー及びトレルチは共通しているとさしあたり、

ウェーバー及びゲオルゲ・クライスとトレルチの理解の差異について後ほど論じるが、言うことが出来る。それはすなわち、典型的にはウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で論じたように、西欧近代の合理化のプロセスを生んだのはプロテスタンティズムに他ならないという主張である。その上で、この合理化を体現している営みである近代的学問に留まりその合理化のプロセスに耐えるか、学問の内部に美的直観を指導原理として導入しようとするのかがウェーバーとゲオルゲ・クライスを分けることになる。

また、前提となる近代理解がプロテスタンティズムと結びついている以上、ゲオルゲ・クライスの近代批判は反プロテスタンティズムと直結する。「プロテスタンティズムへの決然とした反抗はグンドルフの理論形成の特徴的な構成要素として示される」<sup>44</sup>のである。プロテスタンティズムへの反動としてゲオルゲ・クライスはギリシア的なものやカトリック的なものを称揚する。ニーチェやゲオルゲはそういった力の担い手なのである<sup>45</sup>。しかしこのようなプロテスタンティズム批判はウェーバーにとってみれば関心を惹くものではなかつただろう。ウェーバーは近代的合理性の生みの親としてのプロテスタンティズムの意義を示しこそすれ、現に成立している学問制度の擁護とプロテスタンティズムの擁護が結びつくわけではない。ウェーバーにとって学問への専心は宗教的な価値判断とは切り離されて、それ自身で選ばれるべきものだった。

以上のように、自律的な合理的プロセスとしての近代的学問においてひたすらに事柄への専心を説くウェーバーと、反プロテスタンティズム的色彩を帯びた価値体系を学問内部で実現しようとするゲオルゲ・クライスのそれぞれと部分的には共感を示しながらも両者に満足することの出来ないトレルチは近代、プロテスタンティズム、学問についてどのように捉えていたのだろうか。最後に、近代とプロテスタンティズムの関係、及び生の全体性と学問との関連についてのトレルチの理解を確認したい。

### 3・2．生の連関における学問

ウェーバーとゲオルゲ・クライスは、学問において具現化している合理化のプロセスがプロテスタンティズムに端を発しているとの理解を共有していたし、トレルチにも当然そうした理解が共有されている。しかし、トレルチによればプロテスタンティズムから発したのは近代の合理主義だけではない。トレルチにとっては学問ばかりではなく、「近代世界を、その大部分がまさにキリスト教から成長したものと見なすべき」<sup>46</sup>であるが、近代世界とは一方的に合理化へと向かうプロセスなのではなく、例えばそこには「全理性的文化の国家への吸収にまで至る生活の徹底した合理化と、他方ではこれに対して、個人＝人格的なこと、宗教的なこと、精神的なことの尊厳の権利に与する、幾多の非合理的な力を帯びた反対感情」<sup>47</sup>が存するし、近代を特徴づける「個人主義」にも「合理的個人主義」と「非合理的個人主義」という相反する二つの潮流が認められる<sup>48</sup>。この見方からすれば、プロテスタンティズムは近代的合理性ばかりではなく、近代の非合理性にも責任を持つことになり、ゲオルゲ・クライスからのプロテスタンティ

ズム批判は一面的過ぎることになるだろう。

そしてこのような近代理解とパラレルな議論により、ゲオルゲ・クライスとは違った発想で生の全体性と学問との結び付きが示されるように思われる。ゲオルゲ・クライスは学問内部での美的直観による「入れ替え」を図ったが、トレルチの理解に従えば、学問は近代的な生の営みの一部なのであって、とりわけ人文・精神科学は学問外部の様々な歴史的現実との連関の中で為されるべきものである。すなわち、学問内部で生の全体性を要求するのではなく、生の連関の中に学問を位置づけ、生の連関に対する学問の意義を考えるべきなのである。人文・精神科学はそれ自体では捉えがたい生の営みを対象とし、研究者もまた自分の生を生きている以上、学問という営みが生に対してどのような関係にあるのかが問われねばならない。これは、価値判断を超えて専門的な学問研究へと打ち込むことを訴えるウェーバーに対する批判でもある。トレルチは、学問がその連関の中に置かれるべき「生」を「歴史」の問題として追究する。「歴史的な生の流れの際限無い流動性と、それを確固とした規範によって制限し、形成しようとする人間精神の欲求との関係」<sup>49</sup>である。この関係の問いは名著『歴史主義とその諸問題』の中心テーマであり、本稿ではこれ以上追究することは出来ない<sup>50</sup>。しかし、「古い学問」の立場に立ちながら、学問をその外部に広がる生の連関へと開放し、またそれによって歴史的生の方向付けと形成を行おうとする点に、ウェーバーともゲオルゲ・クライスとも違うトレルチの独自性を認めることが出来るだろう。

そして学問を他の生の領域と結び付ける際に、宗教が必要になるものとトレルチは考える。我々はいくつもの生活圏（生の領域）にまたがって生を営んでいるが、「これらの生活圏に結合と連関を与え、単に並列的に領域があるのではなく、中心を持って複数の領域があるのだと把握しようとするならば、当然のごとく形而上学的で宗教的な要素へと我々は向けられる」<sup>51</sup>のである。ヨーロッパにおいて様々な生の領域を結び付ける「共通精神」の基盤となる宗教はキリスト教において他に無い<sup>52</sup>。しかし「普遍的な支配力を有する教会的教義のドグマティックな強制力」<sup>53</sup>をもはや用いることの出来ない時代にあって、実際にどのようにしてキリスト教を共通精神として、生の全体を統合しうる価値を構築するのか、ということは難問となる。トレルチもやはりこの難問を前に様々な可能性を探っていたようであるが<sup>54</sup>、具体的な像を描くこと無く没してしまった。彼が思い描いていた像を再構成することも重要な課題であるが、本稿ではトレルチの発想の基本的な方向性を示すに留まった。

---

#### 註

<sup>1</sup> 姜尚中、『マックス・ウェーバーと近代 合理化論のプロブレマティーク』、お茶の水書房、1986年、142頁。

<sup>2</sup> 学問論を巡るウェーバーとゲオルゲ・クライスの論争については姜尚中の前掲書と上山安敏、『神話と科学』、岩波書店、1984年、が日本語での古典的な研究である。この論争についての

最新の研究としてはPohle, Richard: *Max Weber und die Krise der Wissenschaft*, Vandenhoeck & Ruprecht, 2009. がある。

<sup>3</sup> 『職業としての学問』は1917年と1919年に二回講演された後、パンフレットとして出版され、没後の1922年に『学問論集』(Weber, Max: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, hg. von Marianne Weber, Tübingen 1922.)に収められた。本稿で引用する際には岩波文庫の尾高邦雄訳(マックス・ウェーバー、『職業としての学問』、尾高邦雄訳、岩波文庫、1936年)を用い、ウェーバー著作集(Weber, Max: *Gesamtausgabe I/17*, hg. von Wolfgang J. Mommsen und Wolfgang Schulchter, Tübingen 1992.以下Weber, GAと略)におけるページ数を併記する。

<sup>4</sup> 『職業としての学問』、31・32頁 (Weber, GA, S. 86)

<sup>5</sup> 『職業としての学問』、41・42頁 (Weber, GA, S. 92)

<sup>6</sup> 『職業としての学問』、65・66頁 (Weber, GA, S. 105)

<sup>7</sup> 『職業としての学問』、55頁 (Weber, GA, S. 100)

<sup>8</sup> 『職業としての学問』、57頁 (Weber, GA, S. 101)

<sup>9</sup> Max Weber, Vorbemerkung, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie. Bd.1*, 1920-1921, S. 14.

<sup>10</sup> 姜尚中、145頁。

<sup>11</sup> 松尾博史、「ゲオルゲ・クライスの「精神運動年鑑」(1)」、『言語文化研究第25巻第2号』、松山大学総合研究所、2006年、119頁。

<sup>12</sup> 「こうして「神話」をタブー化するのではなく、それを包括的かつ徹底的な分析の対象とすることでゲオルゲ派を「神話」から救出しようとする作業は、1990年代になってようやく本格化し始めた。そうしたゲオルゲ・クライスの脱 神話化は、主として「保守革命」をはじめとする文化運動の社会史やドイツ人文・社会科学の学問文化史(ゲルマニスティクの学問史を含む)の領域で注目すべき成果を生んでいる」(前田良三、「神話・学問・メディア ゲオルゲ・クライスをめぐる議論の現在」、『立教大学ドイツ文化論集 ASPEKT 32』、1998年、183頁。)

<sup>13</sup> Robert E. Norton, *Secret Germany : Stefan George and his circle*, Cornell University Press, 2002.

<sup>14</sup> Alf Christophersen, *Kairos*, Mohr Siebeck, 2008, S. 54. ヴォルタースについては、以下の論考が参考になる。松尾博史、「『支配と奉仕』 フリードリヒ・ヴォルタースにおけるゲオルゲ・クライスの自己解釈」、『上智大学ドイツ文学論集 38』、2001年、33～57頁。

<sup>15</sup> ベルトラム・シェフォールト、「翻訳と解題 詩人の世界と学問の使命 シンポジウム論集『ゲオルゲ・クライスの学者たち』より(上)」、横道誠・恒木健太郎訳、『社会システム研究 第九号』、2006年。及びベルトラム・シェフォールト、「翻訳と解題 詩人の世界と学問の使命 シンポジウム論集『ゲオルゲ・クライスの学者たち』より(下)」、横道誠・恒木健太郎訳、『社会システム研究 第十号』、2007年。

<sup>16</sup> 『社会システム研究 第九号』、185頁。

<sup>17</sup> 同書、197頁。

<sup>18</sup> 同書、197・198頁。

---

<sup>19</sup> 『社会システム研究 第十号』、215頁。

<sup>20</sup> 『社会システム研究 第九号』、199頁。

<sup>21</sup> Ernst Troeltsch, Die Revolution in der Wissenschaft, *Gesammelte Schriften Bd.4*, SS.653-677. (以下 *Revolution* と略記)

<sup>22</sup> 姜尚中、147頁。

<sup>23</sup> *Revolution*, S. 654

<sup>24</sup> Ibid. S. 656

<sup>25</sup> Ibid. S. 658

<sup>26</sup> Ibid. S. 659

<sup>27</sup> Ibid. S. 664

<sup>28</sup> Ibid. S. 668

<sup>29</sup> Ibid. S. 668f.

<sup>30</sup> Ibid. S. 669f.

<sup>31</sup> Ibid. S. 672

<sup>32</sup> Ibid. S. 675

<sup>33</sup> Ibid. S. 672f.

<sup>34</sup> Ibid. S. 673

<sup>35</sup> Ibid.

<sup>36</sup> Ibid.

<sup>37</sup> Ibid. S. 676

<sup>38</sup> Ibid.

<sup>39</sup> Ibid.

<sup>40</sup> Ibid. S. 677

<sup>41</sup> 前田良三、189頁。

<sup>42</sup> *Revolution*, S. 659

<sup>43</sup> Christophersen, S. 59

<sup>44</sup> Ibid.

<sup>45</sup> この点についてもトレルチは認識しており、「異教へと向かう美的な反キリスト教性とカトリック化し法と規範を求めるキリスト教性の対立」を「新しいロマン主義 = 学問における革命」に認めていた。( *Revolution*, S. 676 )

<sup>46</sup> Troeltsch, Ernst: Das Wesen des modernen Geistes, in *Gesammelte Schriften Bd. 4*, S.332.

<sup>47</sup> Ibid. S. 304

<sup>48</sup> Ibid. S. 306

<sup>49</sup> Troeltsch, Ernst: *Der Historismus und seine Überwindung. Fünf Vorträge von Ernst Troeltsch. Eingeleitet von Friedrich von Hügel* (以下 *Überwindung* と略記) , Berlin, 1924, S. 1.

---

<sup>50</sup>本稿で扱った論考「学問における革命」はトレルチ晩年の主著『歴史主義とその諸問題』との相互参照が指示されている論考であり、『歴史主義とその諸問題』では複数の箇所ではゲオルゲ・クライスや「若い世代」を意識した議論が為されている。注目すべきことには、『歴史主義とその諸問題』のウェーバーについて論じた箇所でも「若い世代」との対比が為されている。当時の「学問における革命」は歴史主義についての「諸問題」の一つであり、「学問における革命」の文脈に『歴史主義とその諸問題』の議論を位置づけることは可能であるし、論じられるべきテーマである。これについては稿を改めて議論したい。

<sup>51</sup>*Überwindung*, S. 56

<sup>52</sup>トレルチはここでプロテスタント的なものとカトリック的なものの優劣をつけるような議論は行わない。

<sup>53</sup>*Ibid.* S. 48

<sup>54</sup>例えば、ティリッヒなどが主要メンバーであった宗教社会主義のサークルの会合に顔を出すなど、キリスト教を共通精神としてヨーロッパ近代社会のはらむ問題を克服する道を模索していた。(Christophersen, S. 16ffを参照)

こやなぎ・あつし（京都大学大学院文学研究科・博士後期課程）



